

序にかえて

和歌山大学教育学部附属小学校長 矢 萩 喜 孝

平成10年12月、当時の文部省より「新学習指導要領」が示されて以来、子どもたち一人ひとりの〈生きる力〉を目標に掲げながら、基礎学力の充実とともに、「学校完全5日制」の実施や、あるいは「総合的な学習の時間」の実現など、これまでに全国的規模で、さまざまな教育的提言がなされてきました。

愚考するに、このような一連の教育改革は、戦後教育のありかたの重要な結節点でもあり、同時に、来るべき“未来の教育”への、確かなプロローグであろうと思います。

一方で、子どもたちが放埒で勝手気儘な日々を過ごすことなく、「真の人間」として成長するためにも、大人はしっかりとした教育を授けなければならないことは、言うまでもありません。

しかも、人間が人間として生きていくかぎり、「教育」そのものが、わたしたちにとって間絶することのない、永遠の営みでもあるとあらためて感じます。

ともあれ、この世にあって〈未来からの留学生〉でもある子どもたちが、“学ぶよろこび”を享受しながら、未来に向かって「生きる力」を発揮するためには、果たしてどのような教育がのぞましいのか、また、その理想とする方法論とは何か、ということについて、わが校の教員たちは、これまでに真剣に討論を重ねてきました。

本校では数年来、「わたしが生きるわたしの学習」という教育の目標を基本に掲げ、教科学習の研究、および本校独自の総合的な学習である「みらい」の学習の研究を、併せおこなっております。

わたしをはじめ、とくに教員たちは、あくまでも〈まなびの主人公は子ども〉であることを常に自覚しながら、これからも日々、研鑽に励んでいくつもりであります。

みなさまには今後とも、忌憚なきご指導をいただければ幸いです。